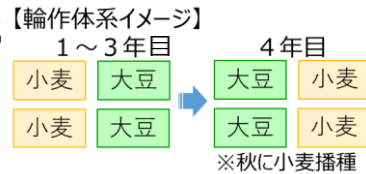


# 本宮市青田地区

## 1 想定するモデルとしての姿、モデルとする事項

- 大規模水稻栽培との組み合わせによる小麦、大豆の収量・品質の安定化
- 大豆、小麦の輪作体系（3年に1回程度ほ場を交換）の確立を図る。



## 2 生産概要（中心的な担い手の概要）

- 【R3年作付面積】水稻：25.0ha、小麦：0.7ha、大豆：1.8ha、ミニトマト：8a
- 作付時期を拡大するため、移植栽培と湛水直播を組み合わせている。
- 水稻の作付面積が徐々に拡大。（R7：30.0ha）

## 3 取組のポイント（モデルとして構築する取組）

### ＜需要に応じた生産を徹底＞

- 実需者の要望を踏まえ、令和3年に大豆の品種を「タチナガハ」から「里のほほえみ」に切り替え、令和7年に小麦の品種を「きぬあずま」から「さとのそら」に切り替えた。

### ＜地域の実情に応じた新技術・新品種の実証と導入＞

- 令和7年産小麦における新品種「さとのそら」の実証展示
- 令和7年度「大豆の高温少雨条件下における湛水効果」の実証展示



図1 小麦「さとのそら」実証ほ現地検討会

## 4 取組成果

### ＜小麦新品種「さとのそら」の普及拡大＞

- 現地検討会やチラシを通して新品種の周知  
管内における令和8年産さとのそら作付面積：9.4ha

### ＜小麦の収量向上＞

- 新品種導入と適期播種により単収が増加

### ＜大豆の収量向上＞

- 水稻の作付面積拡大に伴い、適期播種が困難となったことに加えて、開花期前後の高温少雨の影響により単収が低い状況にあったが、令和7年度に「高温少雨条件下における湛水効果」の実証ほを設置するとともに、極晩播狭畦密植栽培を導入した結果、単収が増加

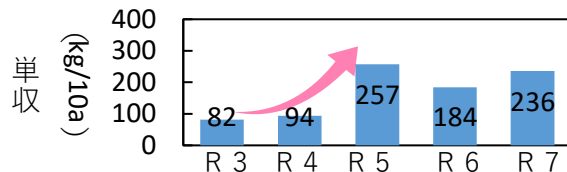


図2 モデル地区における小麦の単収の推移

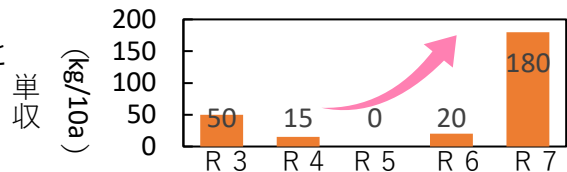


図3 モデル地区における大豆の単収の推移

## 5 残された課題

### ＜大豆＞

- 生産者自らが開花期前後において高温少雨条件下に湛水を判断することは難しいため、ほ場内の地下水位を簡易に測定できる簡易地下水位測定法を周知する必要がある。また、湛水のための用水を確保することが困難なほ場の対応が課題である。

### ＜小麦＞

- 天候により水稻の収穫作業の遅れが生じ、小麦の適期播種が困難となるため、小麦立毛間播種について検討する必要がある。